

好きです!



9年生の杉岡佳朋さん(左)と9年担任の穴戸愛美先生に聞きました。

「いいたて学」は「飯館村のために何かができる」ところがとて面白いと思います。村をよりよくするためのアイデアを皆で出し合い形にしていくのが楽しいです。私は人を呼べる施設としてプレイスポット「うっず・あどべんちゃ〜」をつくりたいと考えました。いつか実現できたらいいなと思います。「いいたて学」で調べてみると、これを生かしたらよりよい村になると思えるところがたくさんありました。将来やりたいことはまだ決まっていますが、選択肢があるならできれば村のどこかで働きたいと思っています。

小さい頃のことはあまり覚えていないけれど私の「ふるさと」は飯館村だと思っています

義務教育学校となった令和2年度から「いいたて学」で学びや活動を進めている児童生徒の皆さんに聞きました。

「いいたて学」は好きですか?

今年赴任したばかりの私は初めて「いいたて学」に取り組んでいます。村の外に住んで通っている生徒も、こうして将来も村に関わりたいと考えることができる一ふるさとについて知り考えることはすごく大事なことのだと改めて感じます。



9年生

「飯館村の未来」をテーマに

「カフェ」を考えたグループは花をモチーフにしたフルーツサンドなどを考案。「特産品」のグループは試作した「いいたて 風キムチ(飯)」に「あなたのキムチ わたしの気持ち」というユニークなキャッチフレーズ。

後期課程

前期課程

飯館村のよさは、書ききれないほどあると思います。一番はあたたかい心を持っている人がいることです。若い人がもっと農業を担ってほしいということを知って、その一歩に僕達ができるにはどうすればよいかを考えています。

「いいたて学」が好きです。なぜかは「いいたて学」を勉強することで、飯館村の魅力や楽しさが分かり、もっと好きになることができるからです。



好きです!

11月25日、村の農家の皆さん取材して戻ってきたばかりの5年生に聞きました。

私が思う飯館村のよさは、人のつながり、関わり合いがあたたかく楽しいところだと思います。震災後もみんなで助け合い、励まし合っていたことも、すごいと思います。

自然がたくさんあって、とっても居心地がいい村だと思います。村の人は本当に飯館村が好きなんだと感じます。「いいたて学」は村のいろいろなことが分かりとても楽しいです。



5年生

花、蕎麦、エゴマ…村で特色のある農作物を生産している皆さんを訪ねてその思いも聞き取りました。



毎年学校田でお世話になっている佐藤博さん(二枚橋・須萱)から稲作についてたくさん教えていただきました。

「いいたて学」は多くの村民ボランティアに支えられています

学校と村民のつながり

地域コーディネーター



西尾ツネさん(二枚橋・須萱)

震災直後、川俣町の学校の一部を間借りして学校が再開した頃、子どもも先生もがっかりして下を向いていることにふと気がつきました。「何かこの子達のためにできることはないか」。そんな思いで「地域コーディネーター」の資格を取得。機を同じくしてスタートした「コミュニティスクール」の取り組みに協力する形で、村民ボランティアと学校のつなぎ役をするようになりました。

きた時、大きな声を出して喜んでる様子にすごく感激しました。その秋には餅刈りをして、翌年には餅つきをして、いろいろな方に声をかけて活動が続きました。お年寄りに頼もじりの先生になつてもらったこともあり。参加した方々にも「孫が来ない学校だけども来てくれてよかった」と喜んでいただいて、そんな時はつなぎ役ができてよかったと感じました。「いいたて学」を通してまじり合いの精神を引き継いでいけたらありがたいし、子どもに限らず大人にも、飯館にはよいところがたくさんあると伝えたい。さまざまな経験が、未来に進む力も育んでいくと思っています。

自分のふるさとがどんなに素晴らしい所か、住んでいる人と実際に触れ合って学ぶことができる。それが「いいたて学」のよさだと思っています。村の外から通っている子ども達も、村の人と触れ合い、その思いや願いを知ること、勇気づけられていると思います。

承のお手伝いもできると思いますが、将来の村を支える人材を育てていきたいと考えています。また、風づくりや団子さし、凍み餅づくりを教わったり、発表会に向けてのインタビューに協力をいただいたり、「いいたて学」に限らずいろいろな場面で、多くの村民の皆さんに関わっていただき本当にありがとうございます。人々との触れ合いを大切にしていきたいので、これからもよろしくお願ひします。

人々との触れ合いが「いいたて学」をつくる



いいたて希望の里学園 山田 徹 校長